

発話行為の語用論と文法の接点

——「修正」の発話行為に見られる配慮表現より——

Lee 風子

Abstract

This study focusses on the existence of a grammatical device, which can express politeness in performing the speech act of “correction”. Correcting an error made by the interlocutor is a “face threatening act”. One polite way of performing this act is to avoid the use of the 2nd person subject. The existence of such a grammatical device has been noted from the contrastive observation made between advanced learners and native speakers of Japanese in this study. 29.6% of the advanced learners of Japanese employed the 2nd person pronoun subject, whereas only 3.3% of the native speakers used this rather impolite manner of expressing the idea. Grammatical devices such as the choice of subjects noted in this study can influence the level of politeness in Japanese, suggesting the interface between pragmatics and grammar.

キーワード：「修正」の発話行為，主語の選択，配慮表現，比較対照語用論，中間言語語用論

1. はじめに

真理条件が言語理解にとって中心的な位置を占めるものであるとする1960年代初頭までの言語観を打ち砕いた哲学者 Austin (1962) に端を発する発話行為論は、文学、文化人類学、言語学等の分野に影響を及ぼし、本質的に諸分野にまたがる性格を持つ異文化間コミュニケーションに関する研究分野には理論面でも実践面でも貢献している。同じ言語を話す人間と人間の間における伝達の場合でも、ほのめかし、誘導、さぐりなどの発話行為は相手に正しく理解されないことがある。ましてや、異なる文化、言語を背景に持つ人間がコミュニケーションを行う際にはさらなる誤解が生じて不思議ではない。このことから発話行為は普遍的な側面よりむしろ文化により異なったあらわれかたをするのではないかという見方が強くなり、様々な発話行為を対象に、異なる言語文化でのあらわれ方を実証的に示す研究が多々発表されるようになった。その先駆的存在である Blum-Kulka and Olsten (1984) の CCSARP (Cross-Cultural Study of Speech Act Realization Pattern) は、オーストラリア英語・アメリカ英語・イギリス英語・カナダ仏語・デンマーク語・ドイツ語・ヘブライ語・ロシア語の8言語の母語話者と非母語話者を対象とし、「依頼」と「謝罪」の発話行為がどのように行われるかを調査した大掛かりな一連の研究であった。CCSARPでは、各言語における母語話者の発話を明らかにすること、異言語間における発話の類似点と相違点を明らかにすることに留まらず、母語話者と非母語話者の類似

点と相違点を明らかにすることを視野に入れていた。そのため、この研究を契機に、発話行為に関する研究は各言語母語話者の発話を個別に分析してそれらを比較する比較対照語用論研究と、母語と異なる言語を学ぶ過程にある学習者の語用論的能力に焦点を当てた中間言語語用論研究へと発展した。

本稿では日本語母語話者や日本語学習者が対象となった主な先行研究を取り上げながら各々の研究の流れを追ったうえで、従来の研究でなされてきた発話行為における意味公式の頻度やそれらに基づく方略の分析ではなく、言語形式そのものに着目した研究を紹介し、報告し、そこから得られた結果が語用論と文法の接点を示唆するものであることを指摘したい。

2. 先行研究

本節では比較対照語用論研究、中間言語語用論研究の流れを追い、その後、言語形式そのものに着目した研究を紹介する。

2.1. 比較対照語用論研究

Blum-Kulka and Olshtain (1984) の CCSARP を基に、橋元 (1992) は「依頼」・「依頼に対する拒否」・「注意」・「謝罪」・「言いにくい事実の陳述」の5種類の発話行為、6場面を設定し、日本語・中国語・韓国語・タイ語・インドネシア語・英語・ドイツ語・ポルトガル語・ブルガリア語の9言語間で、言語文化による戦略と相手による使い分けを比較した。調査の結果、橋元は相手の負担するコストが大きいほど、また相手に強いる将来の行動変容の程度が大きいほど、発話行為の方略は多彩に、複雑になると説明しているが、ヴァリエーションが多彩で言語による方略が顕著な発話行為（「依頼」・「注意」・「謝罪」）とそうでない発話行為（「依頼に対する拒否」・「言いにくい事実の陳述」）があること、そして、日本語については、方略のヴァリエーションとして豊富な言語ではなく、日本語に独自の表現方略が出現しなかったとしている。また、日本語を含む東洋系言語（中国語を除く）では、どちらかといえば社会的地位の高低によって間接方略を使い分け、欧米文化圏では親疎によって方略の使い分けが行われやすいという傾向があることも指摘している。そして、これらの結果について笹川 (1994) は Brown and Levinson (1987) の「丁寧さのルール」に照らし合わせた解釈を行った。Brown and Levinson によると、人間は普遍的に、人に好かれたい、自分の個性を相手に認めてもらいたいという「積極的なフェイス」と、人に邪魔されたくない、自分の領域を侵害されることなく行動したいという「消極的な」フェイスを有しており、「断り」は聞き手の積極的なフェイスを脅かす発話行為であるとしている。

このように、発話行為に関する研究は Brown and Levinson のポライトネス理論を用いて調査結果を解釈したものが多。ここでは日本語は通常、消極的フェイスを脅かさないように配慮をする「ネガティブ・ポライトネス重視」の言語である一方、アメリカ英語、中国語、韓国語は積極的フェイスを配慮した「ポジティブ・ポライトネス重視」の言語であるとされている。しかし、英語の中でも通常ネガティブ・ポライトネス文化に分類されるイギリス英語を取り上げ、同じくネガティブ・ポライトネス文化とされる日本語との比較対照研究を「依頼」と「非明示

的依頼への応答」の発話行為について行った研究として Fukushima (2000) がある。発話行為に関する語用論的研究を行う際には、それらの行為を行う側と受け取る側との間の力関係 (Power), 社会的距離 (Distance), 負担度 (Imposition) という変数に着目しなければならないが、Fukushima によると、これらの変数に関する判断は日本語話者とイギリス英語話者の間で類似しており、力関係で差が生じない場合、社会的距離が遠い場合には、両語母語話者ともに間接的戦略を選択しているという。しかし、人間関係の判断で力関係が歴然としている場合、あるいは社会的距離が近く親しい間柄では、日本語話者の方がイギリス英語話者より明示的かつ直接的な依頼表現を選択していると報告している。つまり、日本人は状況によってかなり直接的戦略を採るが、イギリス人は一貫して間接的戦略を採ることが多いという。この結果については、相手が間違っただけを述べた際に「修正する」という発話行為を日本語話者、英語を学ぶ日本人、アメリカ英語話者の間で比較した Takahashi and Beebe (1993) の研究結果に共通している点に興味深い。Takahashi and Beebe によると、相手の地位が自分より高いか低いにかかわらず、アメリカ人は一貫して修正行為の前に肯定的評価を行うが、日本人は相手との力関係によって緩和表現を用いる頻度を変えるという。

2.2. 中間言語語用論研究

Blum-Kulka and Olshtain (1984) の CCSARP がそうであったように、比較対照語用論研究を行う際には、比較する言語の母語話者の発話に留まらず、その言語を学ぶ過程にある非母語話者の発話を観察することになる場合が多い。そもそも、非母語話者の発話を分析するためには、まず母語話者の発話行為パターンをベンチマークとして設定する必要もあった。結果、比較対照語用論研究を基にした中間言語語用論研究が盛んに行なわれるようになった。しかし、当初は第二言語に見られる言語運用の側面、特に母語の社会文化的規範が第二言語へ転移するプラグマティック・トランスファーに焦点を当てた研究が大半であった。

例えば、日本語母語話者を対象にした点で先駆的な研究である Beebe, Takahashi, and Uliss-Weltz (1990) は、要請、招待、申し出、提案に対する「断り」の発話行為について日本人の英語学習者グループ、日本語の母語話者グループ、アメリカ英語の母語話者グループからデータを収集し、断り行為を行う発話を構成する意味公式があらわれる順序や頻度を分析した。その結果、日本人の英語学習者に見られる発話行為には日本語から英語へのプラグマティック・トランスファーが起こっているとした。Beebe, Takahashi, and Uliss-Weltz (1990) とは逆に、生駒・志村 (1993) はアメリカ人の日本語学習者グループ、アメリカ英語の母語話者グループ、日本語の母語話者グループの発話行為を分析し、アメリカ人日本語学習者の発話行為にはアメリカ英語から日本語へのプラグマティック・トランスファーが起こっているとした。その後、中国語や韓国語などを母語とする日本語学習者を対象とした中間言語語用論研究でも、学習者の母語から日本語へのプラグマティック・トランスファーが起こっているとした論文が多々、発表された。

しかしながら、1990年代に第二言語習得の研究が進む中、言語習得の過程における学習者の積極的な関与が着目されはじめ、中間言語語用論研究でも、学習者の母語が目標言語に影響を及ぼすという一方向からの視点だけでなく、学習者の視点からの分析も必要であるということ

が指摘され始めた。

日本語話者とインドネシア語話者の「断り」の発話行為について研究した藤原（2007）によると、インドネシア人が母語であるインドネシア語で話す場合と日本語で話す場合との間では断り方が異なり、後者の場合には日本人の様式に近くなっているという。藤原はこれをインドネシア人が抱く日本語話者のコミュニケーション様式についてのイメージ（例えば、「日本人は間接的である」という意識）が作用しているのではないかとしている。つまり、学習者には母語からのプラグマティック・トランスファーが生じるというより、むしろ目標言語話者に近づける「アコモデーション」現象が起こっているのではないかという指摘である。

Selinker（1972）が指摘、命名したように、学習者の発する目標言語は母語とも目標言語とも異なる「学習者特有の言語形式」であり、母語から目標言語に向っていく過程にある、まさに「中間言語」であるが、その実態は学習過程にあるがゆえに常に変化している。それゆえ、言語の学習過程、習得過程そのものに着目する際には、目標言語の発達段階と語用論的能力の関係に注目しなければならないこととなるが、文法能力の発達とともにプラグマティック・トランスファーが減るという報告（Maeshiba et al. 1996）と、L2の能力が高くなるとL1のいろいろな社会文化的規範をL2で表現することができるようになるのでプラグマティック・トランスファーが増えるという報告（Takahashi and Beebe 1987）があり、研究結果は一様でない。

そのような中、遠山（2005）は中国人日本語学習者の中でも初級終了直後、中級学習段階、上級学習段階と異なる学習段階にある中国人学習者が用いる「依頼を補助する方略」の種類と量に着目し、丁寧さ表現がどのように習得されるかを横断的に調査した。結果として、上級学習段階では中級学習段階までに比べて方略数が急増し、日本人学生が使用しない方略も見られたことを報告し、言語処理能力が上ったために使用できる方略の種類や数が増加した一方で、相手レベルと丁寧さのマッピングには母語の影響が現れたとしている。

このように、プラグマティック・トランスファーについては学習段階における増加・減少に留まらず、発話行為研究における原則として着眼すべき変数（発話行為を行う側と受け取る側との間の力関係、社会的距離、負担度）そのものにも母語の影響があり得ることを考慮しなければならない。

また、語用論的能力を考える際には、目標言語の異なる発達段階にある学習者間のみならず、その言語が話されている環境にある者とそうでない者との間の違いにも着目すべきである。Kasper and Schmidt（1996）が指摘するように、学習者の語用論的能力は文脈としての社会・文化的要因の作用を強く受けることから、外国語学習の環境にいるよりも第二言語学習の環境にいる方が習得されやすい。そこに着目した伊藤（2005）は来日3年目、2年目、1年目、滞日経験の無いマレー人日本語学習者グループを対象に「勧誘に対する断りの返答」を意味公式の分類に基づき分析した。その結果、来日3年目と1年目の学習者との間、ならびに来日3年目の学習者と滞日経験の無い学習者間で統計的に有意差が見られ、滞日期間が学習者のポライトネスに影響を与えたとしている。

一方、滞日経験の無いタイ人日本語学習者のみに焦点を当てて「断り」の発話行為について研究を行った Worasri（2012）は、学習者には母語からのトランスファーが見られるもの（「終了時の挨拶の話題関連型」の使用率の低さ、「次回への意志表現」の使用）、日本語母語話者と

の共通点が見られるもの(「話題導入」「話題導入の積極型」「連絡のお礼」「終了時の挨拶の話題関連型」)、母語、目標言語のどちらとも異なるもの(断り表現の回避、願望表現の使用率の高さ)があると報告している。Worasri は母語、目標言語のどちらとも異なるものを「学習者特有の言語形式」としているが、この「学習者特有の言語形式」については、実は、意味公式の頻度やそれに基づく研究が発表され始めた1990年代から既に指摘されていた。

2.3. 言語形式に着目した研究

日本語学習者に見られる「断り」の表現を日本語母語話者のそれと比較したカノックワン(1997)によると、学習者は断りの「理由」の命題に後接する形式(例:理由+ので)は比較的上手に用いるのに対して、相手に対する心配りを示す終助詞や断りの表明である「不可」の命題に前接及び後接する形式(例:やっぱり無理かな)、そして「断り」の前触れとなる「否定的なマーカー」(例:うーん、あはー)の使用は困難であるという。「うーん」や「あはー」などのフィラー、「よ」や「ね」などの終助詞は典型的に会話に見られる言語形式であり、その後、多々発表されるようになった会話分析の研究の必要性をこの頃から示唆するものであったといえよう。

Lee(1998, 2002)は「断り」の発話行為について、日本語母語話者、日本人英語学習者、英語話者の三グループを比較したものであったが、日英対照語用論研究としてではなく、英語を学ぶ過程にある日本人を対象とした中間言語語用論研究として位置づけられるものである。ここでは、英語話者には見られず、日本語母語話者の日本語と日本人英語学習者の英語に見られた特徴として、目下から目上への断りには疑問文を使用するという傾向のあることが明らかになった。英語話者以外にも、中国語母語話者、韓国語母語話者に対して同様の調査が行われたが、英語話者と同様、中国語話者、韓国語話者による日本語の「断り」には疑問文の使用がわずかしかなかったことから、疑問文の使用は日本語母語話者の特徴であると結論づけており、文法形態に着目した語用論研究となっている。

3. 「修正」の発話行為に関する調査

発話行為に関する語用論研究には相手のフェイスを脅かす発話行為(Face Threatening Act)として、「断り」や「依頼」に着目したものが多いが、本節では相手が間違っただけを言った時に行われる「修正」の発話行為に着目した調査結果を報告し、考察を加えたい。

3.1. 調査の対象と方法

調査の対象としたのは、中国で日本語を学ぶ中国人学習者54名と日本語母語話者59名で、全て大学生であった。中国人日本語学習者は、設定した談話完成タスクを遂行できると判断される日本語力を有しており、実際8割以上の学生が日本語能力試験N1を合格している者であった。設定した談話完成タスクでは、場面の説明に加え、談話の最初の言い出し以外はずべて空欄とした自由作成に近いものであった。調査対象者が全て大学生であったため、場面は大学生が遭遇するであろうものとした。目上である「先生」が間違っただけを言った場合、日本人学

生の多くは自分に直接、影響が及ばない限り無言でいることが多いという結果がTakahashi and Beebe (1993)で報告されていることから、「レポートの締め切り」という、学生に直接、影響を及ぼすもので、学生が何か発言せざるを得ないというものを設定した。以下が実際に用いた場面である。

場面：先生が授業の時にレポート提出日の確認をするが、先生が間違えている（先生が最初に言った日と違う）ことに気づき、その場でそれを指摘したい。

先生： 今学期のレポートの締め切りは12月20日です。遅れず出すように。

自分： _____

先生： _____

自分： _____

先生： _____

自分： _____

なお、このような談話完成タスクによるデータ収集の方法そのものについては、実際の発話でなく、タスクを遂行した者の言語意識を調査するものに過ぎないという批判があるが、日本語母語話者と日本語学習者との間に違いが出るとすれば、比較対照語用論研究や中間言語語用論研究にとって貴重なデータであると考えられる。

3.2. 結果と考察

収集したデータを分析した結果、相手が間違っただけを言った時に「修正」という発話行為では、相手が目上の場合、その相手を主語にした文法形態で発話行為を行うか否かにおいて学習者と母語話者の間で顕著な違いが見られた。以下、相手（ここでは「先生」）を主語にした文法形態を用いた例とそうでない例を、各々、日本語学習者と日本語母語話者別に挙げておきたい。

【相手を主語にした形態】

日本語学習者の例

- (1) 先生は先日には12月25日だとおっしゃっていましたので。
- (2) 先生、最初に言った締め切りは12月10日ですが、いまはちょっと間違えているかと思いますが。
- (3) 先生、失礼ですが、先日先生は18日と言いました…
- (4) あ的那样、ちょっと失礼ですが、私のおぼつかない記憶では、前日、先生が「締め切りは24日」と言いましたが…。

日本語母語話者の例

- (5) すみません、前回、12月18日とおっしゃってたと思うんですが…

(6) 先生, 以前〇月〇日とおっしゃっていませんでしたか。

【相手を主語にしない形態】

日本語学習者の例

(7) 先生, 失礼ですが, 締め切りは12月20日ですか。

(8) 先生, 締め切りは12月25日ではないですか。

日本語母語話者の例

(9) 先生, レポートの提出日は12月21日だと前伺ったのですが…

(10) 先生, 事務室と先生の提出日が違います。どちらが正しいのでしょうか。

(11) 先生, このプリントには12月*日までと書いてありますよ。

(12) 先生, 締め切りは22日ではなかったですか。

表1は相手の間違いを修正する行為において相手を主語にする文法形態を採った者の数と割合を示したものである。割合は調査対象者の数である中国人日本語学習者54名, 日本語母語話者59名を元に出されたものである。

表1: 「修正」の発話行為で相手を主語とした形態を採った者の数と割合

	人数	割合
中国人日本語学習者 (N=54)	16	29.6%
日本語母語話者 (N=59)	2	3.3%

相手が間違っていることを指摘するのは明らかに相手の積極的フェイスを脅かす Face Threatening Act であり, 何とか相手のフェイスに配慮しながら表現する方法を探るのがポライトネス・ストラテジーである。上記, 学習者の例 (4) でも「あのう, ちょっと失礼ですが, 私のおぼつかない記憶では…」と努力している様子が窺えるが, 相手を主語にすることを避けるストラテジーまでは習得していない。

守屋 (2004) は日本語の特徴・日本語らしさと言われるものには配慮表現につながるものが少なくないとし, 日本語の文法構造的な特徴とそれらが配慮表現に連なる可能性があるものとしていくつか挙げているが, その中に自動詞的表現と他動詞的表現の使い分けがある。例えば, 「あ, その花瓶割っちゃったの」を「あ, その花瓶割れちゃったの」と言えば, あくまで現象表現にとどまり, 責任者の明示回避につながる。今回の調査で明らかになった「修正」行為における日本語母語話者と学習者の違い (相手を主語とした文で発話するか否か) もこれに通ずるものであろう。「先生, 間違えていますよ」という代わりに「日付が間違っています」と主語を「日付」にし, 「間違っています」と自動詞を用いれば責任者の明示回避につながる。上記, 日本語母語話者の例 (9) にあるように, 「先生がおっしゃった」と言う代わりに「伺ったのですが…」と, 相手でなく自分を主語にする形態を用いることで, 話者は相手に対して配慮を働かせている。

Lee (1998, 2002) では, 疑問文の使用という形で丁寧さや配慮を示す日本語の特徴について

論じたが、本研究ではそれに加えて、「主語の選択」という配慮のストラテジーも存在することを指摘したい。

4. おわりに

本稿では、比較対照語用論研究、中間語用論研究の中でも日本語母語話者や日本語学習者が対象となった主な研究を取り上げながら各々の研究の流れを追い、その後、言語形式そのものに着目した研究を紹介、報告した。

今回の調査で明らかになったのは、「修正」の発話行為、ここでは「相手が間違っただけを言った時にそれを正す行為」を遂行する際に、中国人日本語学習者の29.6%が相手を主語とした形態を採っているのに対して、日本語母語話者でそのような形態を採ったのはわずか2名、3.3%だったことである。相手が間違っていることを指摘するのは明らかに相手の積極的フェイスを脅かす行為であり、何とか相手のフェイスに配慮しながら表現する方法を探らなければならないのだが、学習者の場合はそれが敬語の使用等にとどまり、場面に応じて主語を使い分けることで丁寧さを表現できるまでには至っていないことが確認された。

従来、行われてきた発話行為に関する語用論研究は、本稿2.1節、2.2節で紹介した研究を含め、相手のフェイスを脅かす行為が行われる際の発話を「理由」や「代案」などの意味公式に基づき分類し、その頻度や順番について分析したものが大半であった。そこからは、データ収集の仕方、意味公式の分類の仕方に関する議論や、特定の言語の特徴として明らかにされた「間接的・直接的」ということそのものに関する議論にも発展した。しかしながら、本稿2.3節で紹介したように、疑問形などの文法形態によって丁寧さが表現されることについて論じられることは少なかった。本研究では、疑問形に加え、主語の選択という文法形態も丁寧さを表現し得ることに着目した。これらは発話行為の語用論と文法の接点を示唆するものである。

参考文献

- 生駒知子・志村明彦（1993）「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：「断り」という発話行為について」『日本語教育』第79号，pp.41-49.
- 伊藤恵美子（2005）「中間言語語用論における研究方法論の再検証—中間言語による、動的体系としての中間言語の測定—」『世界の日本語教育』15，pp. 25-39
- カノックワン ラオハブラナキット（1997）「日本語学習者にみられる「断り」の表現—日本語母語話者と比べて—」『世界の日本語教育』7，pp. 97-112.
- 笹川洋子（1994）「異文化間に見られる「丁寧さのルール」」『異文化間教育』8，pp. 44-58.
- 遠山千佳（2005）「中国人学習者の丁寧さ表現の習得—「依頼補助」方略の使用から—」『言語文化と日本語教育』29号，pp.8-13.
- 橋元良昭（1992）「間接的発話行為法力に関する異文化間比較」『日本語学』11，pp. 92-101.
- 藤原智栄美（2007）「日本人とインドネシア人の「断り」に見られるラポートマネージメント—発話行為領域と参加領域に関する分析より—」『言語と文化の展望』
- 守屋三千代（2004）「日本語の配慮表現—文法構造からのアプローチ—」『創価大学日本語日本文学』第14号，pp.1-16.
- Lee 風子（1998）「発話行為（Speech Acts）にあらわれる言語文化—日本語母語話者の特徴—」『立命館経

済学』第46巻第6号

- Worasri, K. (2012) 「留学経験がないタイ人日本語学習者の語用論的能力の分析—断りメールの構成から」 『国際交流基金バンコク日本文化センター 日本語教育紀要』 9, pp. 39-48.
- Austin, J. L. (1962) *How to Do Things With Words*. Oxford: Clarendon Press.
- Beebe, L.M., Takahashi, T., and Uliss-Weltz, R. (1990) "Pragmatic Transfer in ESL Refusals." In R.C. Scarcella, E.S. Andersen, & S.D. Krashen (Eds.) *Developing Communicative Competence in a Second Language*. New York: Newbury House Publishers.
- Blum-Kulka, S. and Olshtain, E. (1984) Requests and apologies: A cross-cultural study of speech act realization patterns (CCSARP). *Applied Linguistics*, 5., pp. 196-213.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in Language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fukushima, S. (2000) *Requests and Culture: Politeness in British English and Japanese*. Bern, Berlin, Bruxelles, Frankfurt/M., New York, Oxford: Peter Lang.
- Kasper, G. and Schmidt, R. (1996) "Developmental issues in interlanguage pragmatics" *Studies in Second Language Acquisition*, 18, pp. 149-169.
- Lee, N. I. (2002) "Speech Act Realization Patterns of Japanese Social Refusal: The Question Strategy" In Donahue, R. T. (Ed.) *Exploring Japaneseness: On Japanese Enactments of Culture and Consciousness*. Westport, CT: Ablex Publishing.
- Maeshiba, N., Yoshinaga, N., Kasper, G., and Ross, S. (1996) "Transfer and Proficiency in Interlanguage Apologizing" In Gass, S. and Neu, J (Eds.) *Speech Acts Across Cultures: Challenges to Communication in a Second Language*. Berlin: Mouton de Gruyter, 155-187.
- Selinker, L. (1972) "Interlanguage", *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*. Volume 10, Issue 1-4, pp. 209-232.
- Takahashi, T. and Beebe, L. M. (1987) "The Development of Pragmatic Competence by Japanese Learners of English" *JALT Journal* 8, pp.131-151.
- Takahashi, T. and Beebe, L. M. (1993) "Cross-Linguistic Influence in the Speech Act of Correction" In G. Kasper and S. Blum-Kulka (Eds.), *Interlanguage Pragmatics*. New York: Oxford University Press.

